

令和 7 （2025） 年度
授業評価アンケート

◆1 年次前期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.6 点であった。
最も高い評価項目は、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」であり、3.8 点である。次に高い項目は、5 項目あり、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.7 点、⑦「実際の授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと思いますか」3.7 点、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.7 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.7 点であった。次に高い項目は、4 項目あり、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.6 点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.6 点、⑪「教員の説明が、わかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったとおもいますか」3.6 点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.6 点であった。

評価が低い項目は、2 項目あり、⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達することができたと思いますか」3.5 点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」であり、3.5 点であった。

評価点が、3.8 点以上と高評価だったのは、共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）の⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.81 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.80 点、伸展科目（国語、社会、算数）の⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.82 点、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.80 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.82 点であった。

また、評価点が、3.6 点より低かったのは、教養科目（法律学、情報技術、英語）では、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」は 3.36 点で全体平均 3.6 点より、0.24 点低かった。

共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）については、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」が 3.42 点で、全体平均 3.6 点より、0.18 点低かった。次に低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」は 3.45 点で全体平均 3.6 点より、0.15 点低かった。

また、伸展科目（国語、社会、算数）では、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.43 点で全体平均 3.7 点より 0.27 点低かった。

伸展科目（国語、社会、算数、英語）では、平均値が 3.7 点で教養科目（法律学、情報技術、英語）と共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）の 3.6 点より高く、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」の項目以外の②～⑬の 12 項目全てで教養科目、共通科目の数値より高かった。

【成果と課題】

前期 1 年生の 13 項目の中で、全項目の平均値 3.6 点より平均値が 3.5 点と低かったのが、⑧

と⑩であった。⑧については、特に教養科目（法律学、情報技術、英語）が3.53点と低くなっている。⑩については、特に教養科目が3.36点、共通科目（教育原理、教育経営論、ICT活用の理論と方法）が、3.45点と低くなっている。

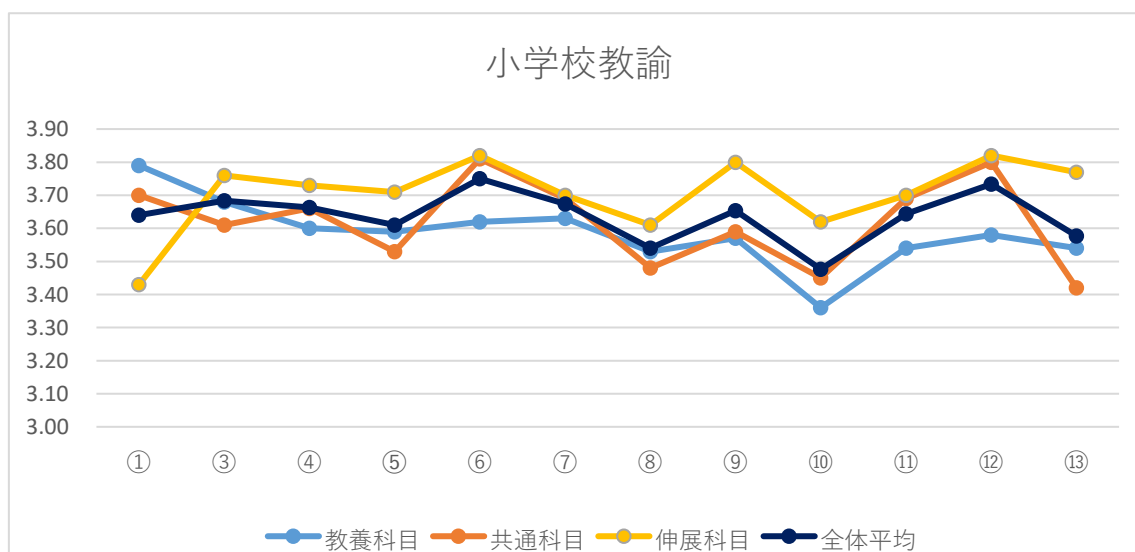
このことを改善するためには、学生にシラバスを意識させて、毎時間の授業の到達目標を学生に示し、達成できるようなワークシートや振り返りシートの活用を工夫するということが大切である。また、演習形式で、アクティブラーニングを意識させ、主体的で対話的な深い学びになるようなKJ法等の思考ツールを使用してのグループワークなどを取り入れて、相互の考えの交流を通して、実践的な指導力が身につくようにしていくようにし、学生にとって楽しい授業と感じる授業を工夫する。

また、授業内容が難しいと感じることがないように、授業の初めにシラバスについて説明し、この科目のゴールを明確に示しておくことが大切である。また、前時授業の振り返りと本時授業に自己評価を取り入れることやスモールステップで個々の理解度を把握しながら授業を進めていくなど学生が理解しやすいように多様な指導の工夫に努めることが大切である。

最も高い評価項目は、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」であり、3.8点であったので、学生にシラバスを意識させ、到達目標、ゴールを意識させて授業を進めていくということの成果が出始めている。

今後も模擬授業・ワークショップ（探検、観察、製作、話し合い）を多く取り入れ、学生自身が児童の立場を体験することができるようにする。「体験→気づき→表現・交流→振り返り」という学習過程を明確に意識させて体感させることに重点を置くようにする。模擬授業・ワークショップの後には、リフレクションの時間を取り、ループリッ（学習評価のための基準表）を基に改善点を共有できるようにしていく。アクティブラーニングは大学教育で重視される概念であるが、小学校では、「主体的、対話的で深い学び」に位置付けられている。ワークショップ型の授業により、アクティブラーニングの理念を自然に体现できる。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.79	3.68	3.60	3.59	3.62	3.63	3.53	3.57	3.36	3.54	3.58	3.54	3.6
共通科目	3.70	3.61	3.66	3.53	3.81	3.69	3.48	3.59	3.45	3.69	3.80	3.42	3.6
伸展科目	3.43	3.76	3.73	3.71	3.82	3.70	3.61	3.80	3.62	3.70	3.82	3.77	3.7
全体平均	3.6	3.7	3.7	3.6	3.8	3.7	3.5	3.7	3.5	3.6	3.7	3.6	3.6



◆1 年次後期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.5 点であった。

最も高い評価項目は、2 項目あり、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.7 点⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.8 点であった。次に、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.7 点であった。

最も評価が低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.4 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.4 点であった。

教養科目（法律学、情報技術、英語）については、最も高い評価は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.53 点⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.53 点であった。最も低い評価は、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.32 点であった。

また、共通科目（発達心理学、教育課程論、教育の方法と技術）については、最も高い項目は、2 項目あり、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.85 点と⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.85 点であった。最も低い評価は、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.51 点であった。

伸展科目（国語科指導法、社会科指導法、算数科指導法、理科、理科指導法）については、最も高い項目は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.72 点であった。その次は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.57 点であった。最も低い評価は、最も評価が低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.26 点であり、その次に低かったのは、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.28 点であった。

【成果と課題】

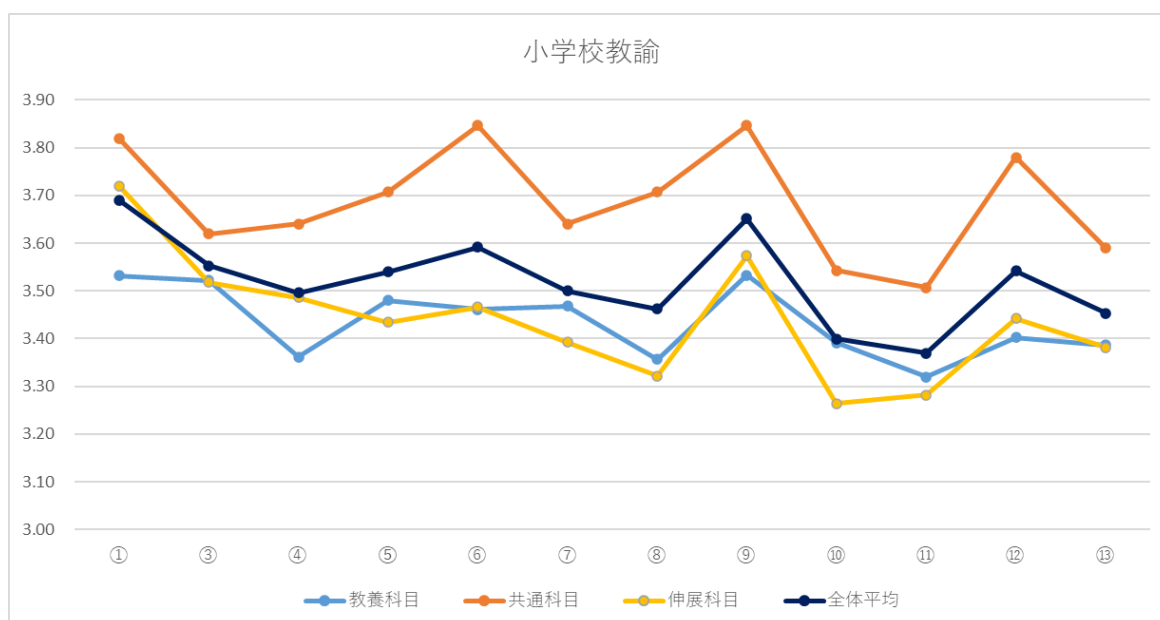
全体で、最も低い評価であった⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.4 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.4 点については、後期は、各教科等の指導法の科目が集中していて、パワーポイントによる発表資料作成、Word での指導案作成、模擬授業等の実践的な指導力を養成する科目のために、授業内容のレベルの高いと感じ、授業についていくことが難しいと感じている学生が存在する。しかしながら、レベルを落とすと学生の自己評価は高くなるが、小学校教育実習に行ったり、教職に就いたりしてから各教科等の指導法について、学生自身が高い壁を感じるようになるので、学生の理解を促す授業改善を担当教員が行っているので、3.4 点というおおむね高い評価点を維持できたと考える。

学生の理解度をスモールステップで把握しながら、授業内容を検討し、アクティブラーニングで対話活動、ディベートやパネルディスカッション、KJ 法などの思考ツールを取り入れたグループワークなどを取り入れ、相互の考えの交流・共有を通して、学生の思考を引き出し、実践的な指導力が身につくようにするとともに、学生にとって楽しい授業と感じる授業の工夫を継続していくことが重要である。

また、模擬授業では、指導案作成段階から、グループでの話し合いを取り入れ、模擬授業においても司会者を中心に模擬授業における振り返りをグループで行い、改善点や良いところを交流できるようにして、全員が積極的に参加できる工夫をする。シラバスを常に意識させて、学生自

身が主体的に取り組んでいることを意識させるようにする。学生の実態を考慮して、授業の難易度が適切であるようにする。毎時間、質問の時間を設定し、学生に寄り添って授業を進めていくなどの授業改善を継続していく。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.53	3.52	3.36	3.48	3.46	3.47	3.36	3.53	3.39	3.32	3.40	3.39	3.4
共通科目	3.82	3.62	3.64	3.71	3.85	3.64	3.71	3.85	3.54	3.51	3.78	3.59	3.7
伸展科目	3.72	3.52	3.49	3.43	3.47	3.39	3.32	3.57	3.26	3.28	3.44	3.38	3.4
全体平均	3.7	3.6	3.5	3.5	3.6	3.5	3.5	3.7	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5



◆ 2年次前期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.7 点であった。

最も高い評価項目は⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.9 点である。次に高かったのは、6 項目あり、④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.8 点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.8 点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.8 点、⑦「実際の授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと思いますか」3.8 点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」であり、3.2 点であった。⑪「教員の説明が、わかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったとおもいますか」3.8 点であった。次に高かったのは、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点 ⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達することができ

たと思いますか」3.7点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.7点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.7点であった。

低かった評価項目は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」であり、3.4点であった。

教養科目（どうぶつ学、体育実技）の平均点は、3.8点、共通科目（教育概論、道徳理論と指導法）の平均点は、3.6点、伸展科目（こども家庭支援論、生活科指導法、家庭科指導法、体育科指導法）の平均点は、3.8点であった。項目別に3.9点以上と高評価だったのは、教養科目では、④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.93点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.93点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.93点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.93点であった。

⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」については、教養科目(3.93点)、共通科目(3.97点)、伸展科目(3.93点)共に3.9以上であった。

また、評価点が、3.6点より低かったのは、教養科目、共通科目では、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」(教養科目3.38点、共通科目3.19点)であった。その他の項目では、共通科目の⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」(3.55点)であった。

【成果と課題】

2年生前期の全体評価は、平均値が3.7点と高かった。

その中で、特に評価が低かったのは、①であった。改善点としては、本学では、マイアドバイザー制度があり、学生一人ひとりにアドバイザーの教員がいるので、個別に面談をして出席を促すようにしている。後期学修では、保育実習、教育実習、園訪問等の就職活動もあり、体調を整え、出席率向上を目指して学生との個別の面談を密にしていく。また、共通科目で低かった⑬については、毎時間の講義形式の授業の中に、教員が意図的、計画的に質問の時間を意識して設定していくことで改善できる。

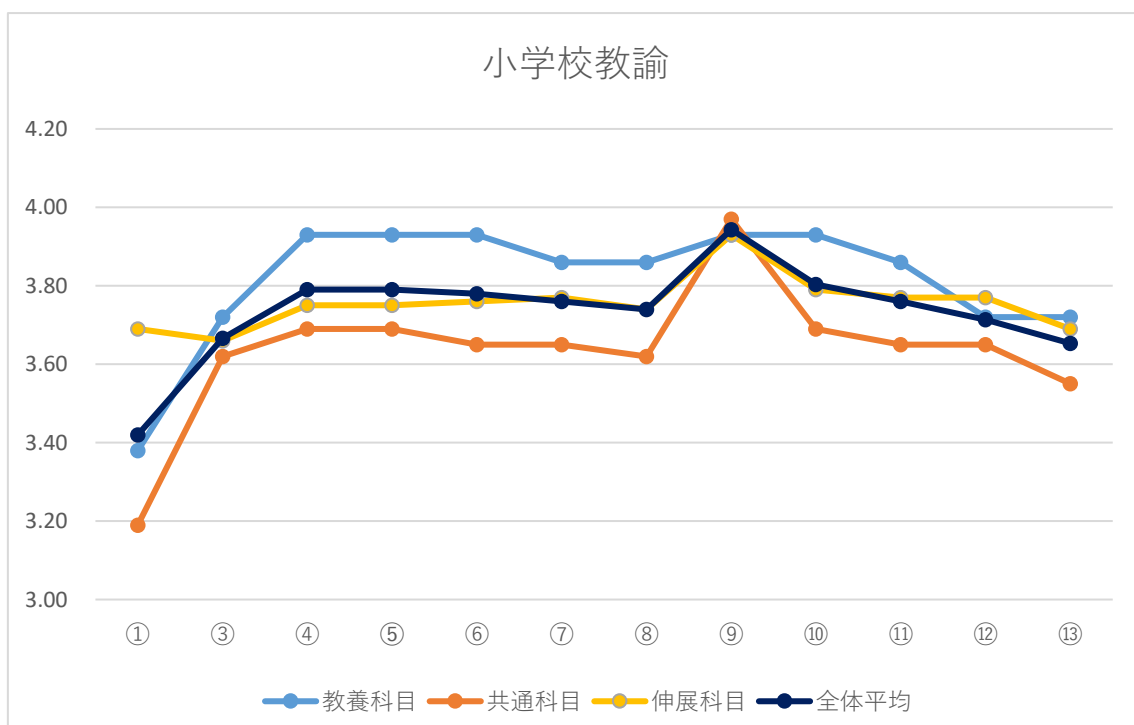
2年前期の教養科目、伸展科目の評価が高かった要因は、模擬授業・ワークショップ（探検、観察、製作、グループワーク、話し合い）を多く取り入れ、学生自身が児童の立場を体験することができるようにしたり、「体験→気づき→表現・交流→振り返り」という学習過程を明確に意識させて体感させることができた科目であるために、分かる楽しさを学生が体験することができたと考えられる。

また、「教科書や補助教材、板書、ICT機器等を効果的に取り入れ、学生の質問にも応え、模擬授業・ワークショップの後には、リフレクションの時間を取り、ルーブリック（学習評価のための基準表）を基に改善点を共有できるようにしてことで、授業に主体的・積極的に取り組むことができ、アクティブラーニングの理念を自然に体現することができた。

その結果、学生は、授業のペースにしっかり追いついていき、授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解でき、授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができた判断される。学生が、授業がシラバスに沿って進められていたと意識していて、授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと自覚していることは、毎時間の自己評価にも良い影響を与え、授業内容を深く理解することができることにつながったと判断される。

大学でのアクティブラーニング型の授業は、学習指導要領が目指す学びを体験的に理解し、子どもに還元できる教師を育成するために大切である、今後もアクティブラーニング型の授業を意識して取り組むことが重要である。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.38	3.72	3.93	3.93	3.93	3.86	3.86	3.93	3.93	3.86	3.72	3.72	3.8
共通科目	3.19	3.62	3.69	3.69	3.65	3.65	3.62	3.97	3.69	3.65	3.65	3.55	3.6
伸展科目	3.69	3.66	3.75	3.75	3.76	3.77	3.74	3.93	3.79	3.77	3.77	3.69	3.8
全体平均	3.4	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.9	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7



◆ 2年次後期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.7 点であった。
 最も高い評価項目は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」
 3.9 点であった。その次は、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」
 3.8 点であった。最も低い評価は、6 項目あり、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていた
 と思いますか」3.6 点、⑦「実際の授業がシラバスに書かれている到達目標に達することを目指し
 た内容になっていたと思いますか」3.6 点、⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達
 することができたと思いますか」3.6 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めるこ
 とに役立ったと思いますか」3.6 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解するこ
 とに役立ったと思いますか」3.6 点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあっ
 たと思いますか」3.6 点であった。

教養科目（レクリエーション講義・実技、体育実技）では、最も高い評価項目は、⑨「授業のペ

ースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.77点であり、その次は、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.76点であった。最も低い評価は、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.47点であった。

共通科目（特別支援教育、特別活動及び総合的な学習の時間、教育相談、教職実践演習）では、最も高い評価は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.97点と⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.97点であった。最も低い評価は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」であり、3.47点であった。

伸展科目（図画工作指導法、外国語指導法）では、最も高い評価は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.83点であった。最も低い評価は、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.10点であった。その次に低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.28点であった。

【成果と課題】

アンケート集計結果より13項目の全体平均は、4点満点中3.7点であり、学生の自己評価は高くなっている。学生は、学位修得を目前にして、教育者としての個性をみがくために、探究したい（生涯にわたる課題）を持つことができるようになり、課題解決に向けて、学び続ける姿勢を持つことができるようになってきている。

本学では、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材育成は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要であると考え、取り組んできている。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換を行っていて、学生の主体的な学修を促す質の高い教育を目指している。

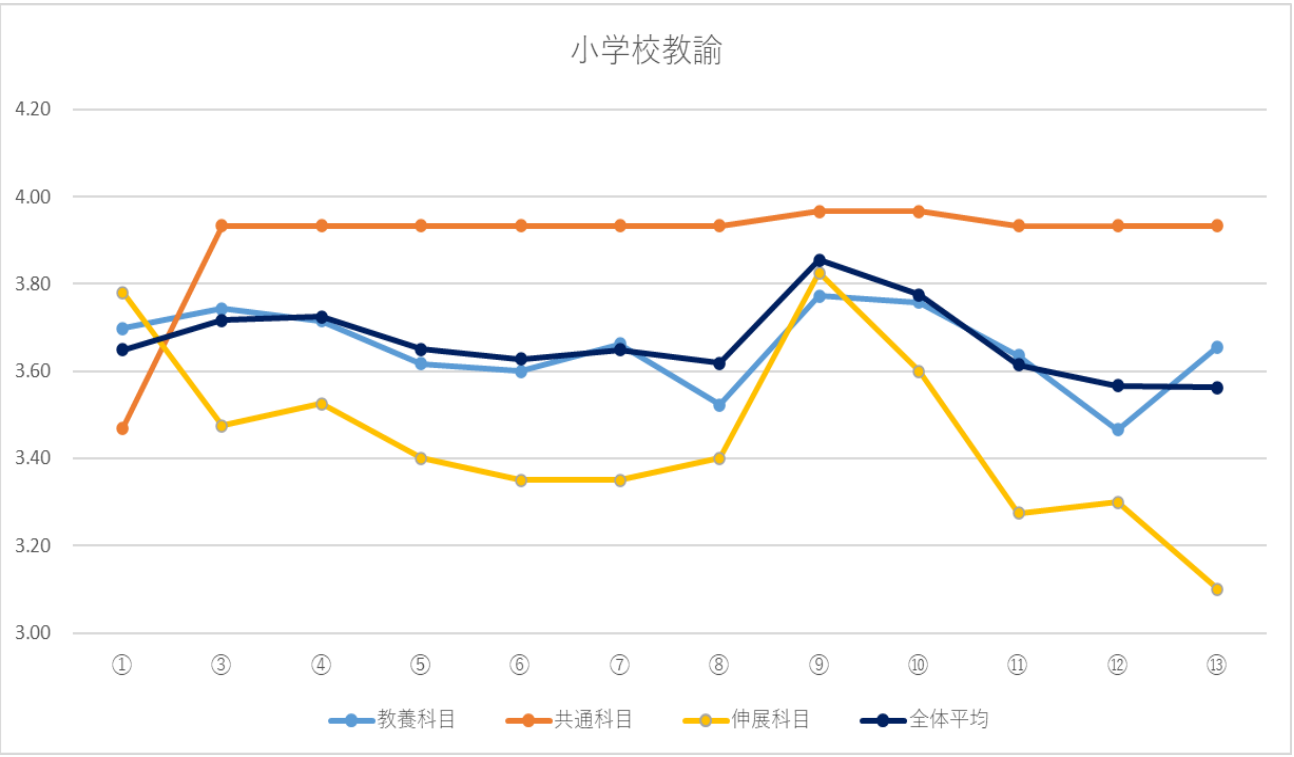
また、アクティブラーニングの実現に向けては、次の3つの視点で授業改善を行っている。①授業に見通しを持って粘り強く取り組み、学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」ができているかという視点、②自己の考えを広め深める「対話的な学び」ができているかという視点、③各教科等の特筆に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出だして解決策を考えさせたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現しているかという視点である。

共通科目で評価が低かった①については、2年生後期になり、卒業を控え、就職活動等で欠席する日が増えているために自己評価が低くなっている。

また、ここでは、評価点について述べていないが、②「授業時間外の学習に週平均どのくらいの時間を使いましたか」についての学生の自己評価が低いことについては、卒業後、教職に就いても研修や教材研究に主体的に熱意を持って取り組むことができる人材を育成することにつながるため、今後も重点課題として取り組む必要がある。学修は、授業だけでなく予習—授業—復習といった、一連のサイクルを通じて深められるものであり、生涯にわたって効果的に学び続けていく上では、そうしたサイクルで教材研究等自己研鑽し実践的指導力を身に付けていく必要がある。授業外でも学修に取り組む中で、自律性や学修スキルが向上する。大学教育でも、事前準備や事後の学修も含めて単位認定を行うようになっており（中央教育審議会、2012）、授業だけでなく、予習や復習などの授業外学修を通じて、学修スキルを育成していくことが目指されている。次回の授業に向けて予習を行うことは、授業での理解を深める上で非常に重要であり、授業内容と関連する知識が事前に活性化されることで、既有知識と新たな情報を関連づけ、疑問点を把握しながら授業に参加でき

るようになることが可能である。今後も継続的な取り組みを行う必要がある。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.70	3.74	3.72	3.62	3.60	3.66	3.52	3.77	3.76	3.64	3.47	3.66	3.7
共通科目	3.47	3.93	3.93	3.93	3.93	3.93	3.93	3.97	3.97	3.93	3.93	3.93	3.9
伸展科目	3.78	3.48	3.53	3.40	3.35	3.35	3.40	3.83	3.60	3.28	3.30	3.10	3.4
全体平均	3.6	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.9	3.8	3.6	3.6	3.6	3.7



◆ 1 年次前期

1 年次前期終了時における授業評価アンケートを集計した結果、各科目における平均値は『教養科目』3.6、『共通科目』3.7、『伸展科目』3.6 点と概ね良好な結果であったと言える。

『教養科目』では、「①この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」に対する評価が最も高く、ついで「③この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」という主体性・積極性の項目で評価が高くなっている。一方で、「⑧到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達することができたと思いますか」と「⑪ 教員の説明が、わかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」「⑬ この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」という 3 項目で平均値をやや下回る結果となった。平均値の数値からもそこまで低い評価とは言えないが、到達目標の設定や授業の理解度を深めるための工夫を要する示唆を得るものと思われる。

【成果と課題】

まず、「きづく」－②（3.8 点）、①③（3.5 点）については高い値が得られたが、学生が教育者として必要不可欠な人権感覚を持っていることを示唆する結果となったものと考えられる。

一方で、⑥の緊急時の対応・体制については 3.2 点とやや低い評価となっていることから、事故や事件、災害発生時における緊急時の対応・体制については養護教諭に求められる主務でもあるため、こどもの生命や健康・安全を保障すること、そして、子どもの個性や気持ちを尊重すること等、学校安全に関わる危機管理能力や危機管理体制とあわせて修得してほしい内容である。近年、こどもの事件・事故に関連する報道は園や学校内外を問わず世間から注視されており、学生からも高い関心が寄せられる事項のひとつである。日常茶飯事的には怒らないが緊急時に学校としてどのような対応をとるべきか、

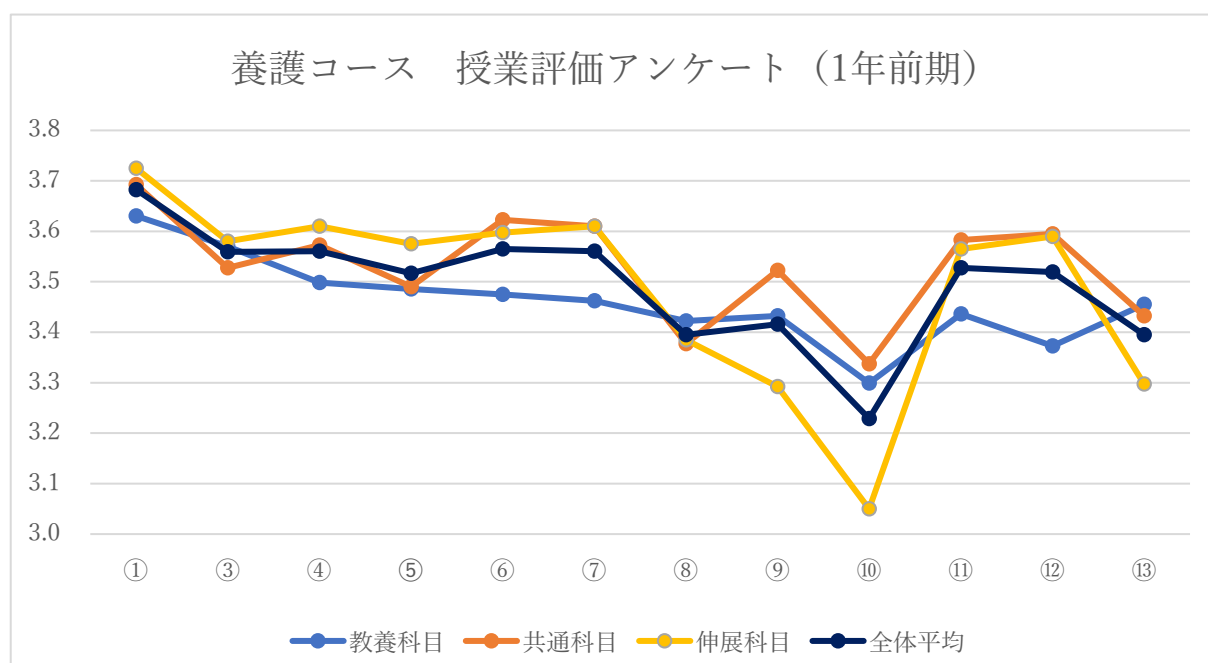
次に「かかわる」の「②社会に出るために必要な挨拶や言葉遣い、身だしなみを身につけている」（3.5 点）の結果より、入学以降、実習生としての心構えを徐々に意識しながら姿勢を整えていることがわかる。ただし、⑧・⑩では、養護教諭としての専門知識を習得した上で児童生徒等とどのように関わっていくかが焦点となる内容であるが、「きづく」－⑧の健康診断と同様、授業評価アンケートでも理解度が低いことが示されているため、実際にその職務を通して児童生徒等と関わる以前に、その職務に関する基礎知識の習得で課題がある可能性もあると推測される。これらの内容には授業時数を多く割り当てているものの、効果的に学習効果が反映できていない結果から、再度、教授方法のあり方を模索している段階である。

最後に、「みがく」では、②（3.5 点）③（3.4 点）の数値より、自分が目指す養護教諭像や養護教諭について学ぶことに高い意欲を持っていることが伺える。本学では、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格に加えて養護教諭二種免許状を取得するカリキュラムとなっているが、入学前及び入学時のオリエンテーションでその意識を学生が適切に持てるよう教員側も働きかけを行わなければならないと実感している。

また、養護教諭の職務ひとつひとつについて單元ごとに学習していくものの、職務の関連性やこれらを俯瞰できるほどのスキルはこの時点では十分でないため、養護教諭と保健室との関連性や保健室が健

康情報の中心的な役割を担うことについては確かに捉えられていないものと想定される。これが、「みがく」－⑥（3.1点）の項目に反映されたと考えられた。あわせて、⑦の学校保健計画の作成も1年次前期の段階で既習するものの十分に消化されていないことがわかり、養護実習、実習後の教職実践演習へと継続的に教授すべき内容と考えている。

上記ディプロマ・ポリシー達成度の値から、1年次前期の達成目標について学生自身は達成できたものと実感していることがわかる。学生の意識としては十分な値と考えられるが、養護教諭について学習し始めたばかりで、養護教諭の職務や保健室の機能についておぼろげながら全景が見えてきた段階であり、実際にはまだ具体的な職務を的確には捉えられていないものと推察する。



◆ 1年次後期

1年次後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4点満点中「きづく」3.4点（84.5%）、「かかわる」3.3点（83.1%）、「みがく」3.5点（87.0%）であり、全体としては3.4点（84.4%）の達成度が示され、前期に比べて微増している。

「きづく」では、「②一人ひとりの特性や個性を把握することの重要性を理解している」で3.6点と高い値を示したが、「①養護教諭としての気づきを感じとり、様々な心身の状態や課題を捉え、養護診断を想定することができる」で3.2点となった。

「かかわる」では、「⑨他者との関わりやコミュニケーションの基礎・基本を身につけている」（3.6点）で最も高い値を示したが、「⑤こどもの生涯にわたる健康の保持増進に必要な保健教育の内容及指導方法及びその評価について理解している」・「⑦学習指導要領を踏まえ、保健教育における養護教諭の役割を理解し、基礎的な知識・技術を身につけている」では3.2点と平均値よりやや低い値となった。

「みがく」では、全般的に高い値を示しているが、「③養護教諭になりたい、または、養護教諭の免許を有する保育者になりたいという強い意志を持っている」で3.6点と最も高い値となっている。

【成果と課題】

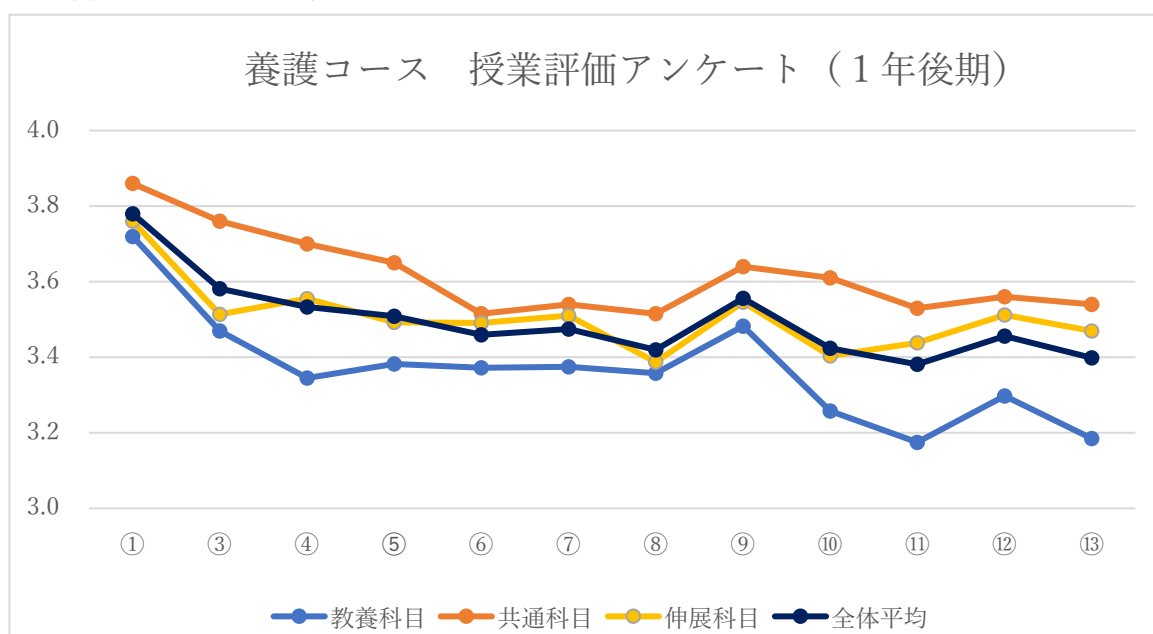
まず、「きづく」では、②（3.6点）の結果から、前期から継続して、学生が子どもの特性や個性の把握について意識及び重要視していることがわかる。反対に、今期の最大の学習事項である“養護診断”に

関わる項目①が 3.2 点となっており、養護教諭として身体面のみならず心理面・社会面・生活習慣の Assessmentを行い、総合的に判断することの難しさを感じていることがわかる。

次に「かかわる」－⑨ (3.6 点)、③ (3.3 点) から、他者との関わり、特に、チーム学校としての重要性を認識できたのではないかと伺える。一方で、「きづく」の結果とも関連するが、養護教諭の職務のうち、保健教育で消極的な値を示している。保健教育では、授業設計や指導案作成等の基礎的な学習をするが、授業内かつこの期間のみで、これらの内容を完全に修得するものではなく、現場での実習や今後の教員生活の中で研鑽していく内容であるため、養護教諭の専門性を磨くべく、今後の実習や実践経験も踏まえながら理論と実践とで往還的に修得することを期待する。

最後に、「みがく」では、③ (3.6 点) 以外に全般的な数値より自分が目指す養護教諭像や高い意欲を持っていることがわかった。しかし、養護教諭の専門性を 1 年間で身につけることは容易なことではなく、1 年次の学びを 2 年次科目や実習で深めていくことが必要であると思われる。

ディプロマ・ポリシー達成度の値や上記のことから、この時期に修得すべきものについては概ねできたものと評価する。その一方で、1 年次後期では、前期に学んだ養護教諭の職務について演習を通して学習体系を組んでいるが、演習や実践をする中で実体験として養護教諭の専門性について難しいと捉えているのではないかと推測する。学生自身がわかっていたつもりでもいざ実践してみると、わからないことがわかる、あるいは自分自身ができると思っていたにもかかわらず、やってみるとできないことがわかる、という経験をする時期であるため、体験的な学びを可能な限り取り入れながら、学生の理解度や実践力を高めていきたいと考える。



◆ 2 年次前期

2 年次終了時のディプロマ・ポリシーの到達度結果のそれぞれの平均は、「きづく」3.4 点（85.8%）、「かかわる」3.3 点（82.4%）、「みがく」3.5 点（86.6%）であった。

「きづく」で高い評価を示したのは、「③一人ひとりの特性や個性を把握することの重要性を理解している」および「④障がい者理解を深め、共生社会の実現の重要性を理解している」3.7 点、「⑤人権問題や人権侵害に気づき、当事者の心情を推し量ろうとしている」3.6 点であった。最も低かったのは、「②学校組織や校務分掌について理解している」3.0 点であった。

「かかわる」では、「③保健室に来室した児童生徒のニーズおよび対応の仕方について理解できている」が 3.5 点と最も高く、「⑦保健指導について児童生徒に必要な保健指導案の立案ができる」および「⑧保健指導の基礎的な知識および指導技術が身についている」がいずれも 3.1 点と低い結果となった。

「みがく」では、「④担当教員等からの指導や助言を真摯に受けとめ、最後まで責任を持ち実習へ取り組むことができた」が 3.6 点と最も高く、「①養護教諭または養護教諭の免許を有する保育者として、自身の長を伸ばす方法や課題を解決する方法を考えることができる」は、3.3 点という結果であった。一方、「③養護教諭になりたい、または、養護教諭の免許を有する保育者になりたいという熱意を持ち、実習へ主体的に取り組むことができた」「実習を通して自分自身の養護教諭としての課題を見つけたり、適性を考えたりすることができる」は、3.5 点と高い値を示している。

【成果と課題】

2 年次終了の達成度は、「きづく」「かかわる」「みがく」のすべてにおいて 3.0 点以上あることから目標は概ね達成できたものと推察する。

「きづく」では、③および④が最も高い値を示すことから、個々のもつ能力を生かし、伸ばす学修への理解と個性を尊重し、支え合うことへの重要性が理解できているものと考ええる。

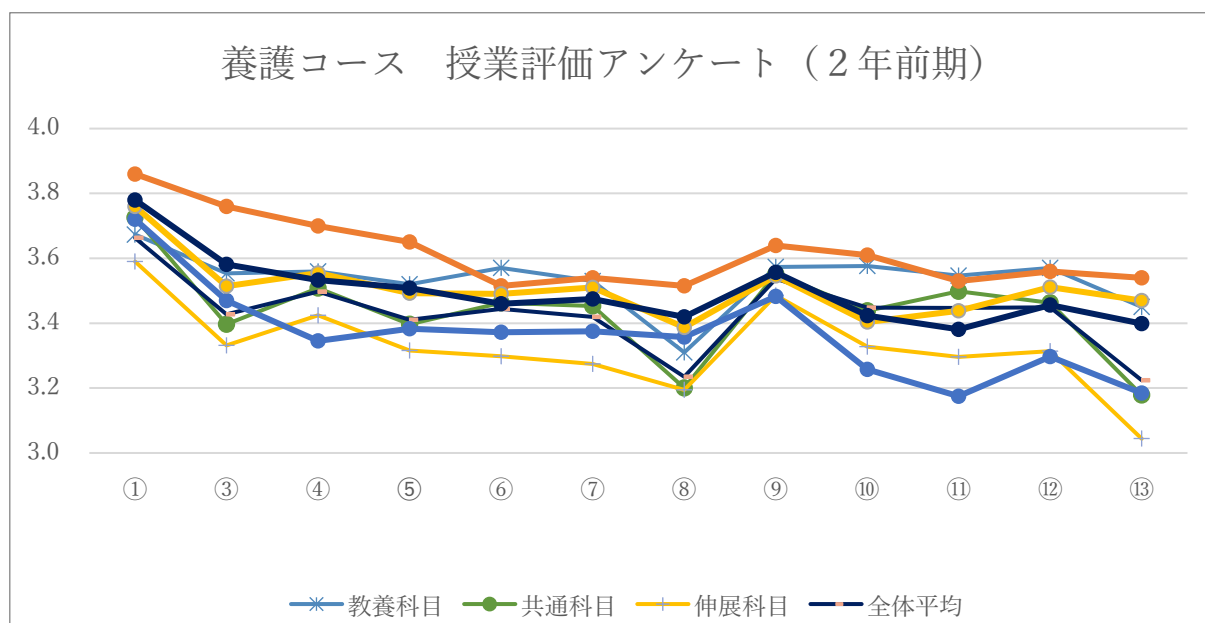
「かかわる」では、③が高いことから、個々の児童生徒の問題の把握と対応が実習において満足できる働きかけであったと考える。

「みがく」では、3 週間の臨地実習を終えることができたことが達成感につながり結果に反映できたものと考ええる。

前年度（23 年次生）の 1 年次後期の達成度では、「きづく」3.2 点、「かかわる」3.2 点、「みがく」3.3 点であったが、2 年次の達成度では、すべての項目がそれを上回る高い値となっている。これは、対こどもとの関係性を築きながら取り組むことができた養護実習の経験が、学生にとって大きな学びとなり、また、自分に残された課題をみつけるきっかけとなったと考える。

最後に、前年度比較をした際、22 年次生では、「きづく」3.3 点、「かかわる」3.0 点、「みがく」3.5 点といずれにおいても 23 年次生の結果の方が高い値となっている。これは、各教員が 3 項目を念頭に置きながら授業展開したことで学生へのアプローチが効果的なものとなったのではないかと考える。

一方、②の学校組織や校務分掌についての理解については、例年同様に低い結果となった。学校の組織等について、理解していなかったことにきづくきっかけとなる実習でもあったと考えることができる。



◆ 2 年次後期

2 年次後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4 点満点中「きづく」3.5 点（87.5%）、「かかわる」3.4 点（83.9%）、「みがく」3.5 点

（87.5%）であり、全体的には 3.4 点（84.3%）と良好な結果であるとともに、1 年次後期及び 2 年次前期と同様の値を示した。2 年間の学びとしては、十分に達成できたものとする。

「きづく」では、「③体罰をしない覚悟をもち、**体罰によらない指導方法について理解**している」（3.8 点）を筆頭に全般的に良好な結果を示している。ただし、「①養護教諭としての基本的な知識・技術を習得し、**養護教諭としての気づきを意識しながら、こどもの健康状態を判断することができる**」の項目では 3.3 点にとどまり、昨年度の傾向と同様の結果となった。

「かかわる」では、「①こどもの発育・発達やこどもを取り巻く環境の理解に努め、**こどもの心身の状態を適切に判断し、必要に応じて関係者と連携しながら支援や保健指導をすることができる**」・「②こどもの健康課題を把握し、**解決に向けた支援・指導及び助言に関する内容と方法を理解**している」・「⑤健康課題のあるこどもに対して、必要な情報をもとに関係者と連携しながら支援することができる」・

「⑥個や集団を指導する手法（指示やほめ方・しかり方）を身につけている」の 4 項目で 3.5 点以上を示しており、こどもの状況に応じた個別または集団の保健指導について概ね学修できたものとする。

ただし、「④諸問題への**組織的な対応**の重要性を理解し、その手法を身につけている」・「⑦こどもの実態の把握に努めながら、学校保健委員会等の**保健組織活動の活性化**について方策を考案できる」では 3.0 点という評価となっており、具体的な手法や組織的な対応については現場に出てからの修得に期待する結果となった。

「みがく」では、「②養護教諭になりたい、または、養護教諭の免許を有する保育者になりたいという**強い意志**を持っている」・「③養護教諭としての必要な資質・能力を身につけるために、**学ぶ意欲と志をもち、自ら学んでいる**」について 3.8 点と高い値を維持した一方で、「①養護教諭または養護教諭の免許を有する保育者としての個性をみがくために、**探求したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つ**ことができる」項目では 3.0 点とこのカテゴリー内では低い値になっている。これも昨年度の結果と同様の傾向を示している。

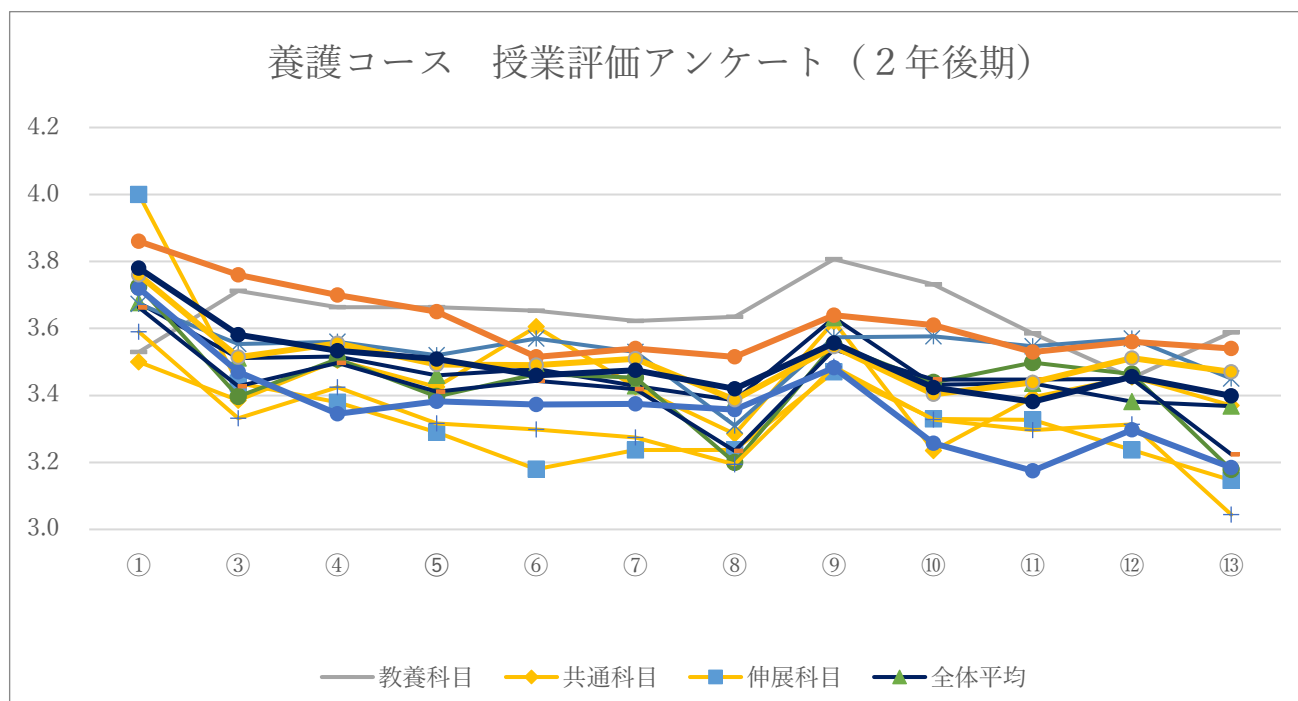
【成果と課題】

2 年次後期は、養護実習を含むすべての実習を終え、免許必修に関わるすべての科目を履修し終えることになる。教職科目の中には「教職実践演習（養護）」が設定され、養護教諭についての職務全般を統合する時期に匹敵する。

その中で、「きづく」－③の結果は、教員の資質とも言うべき、こどもの人権や権利を尊重する方策を理解し、保護者をはじめとする他者との連携を重要視することができていることを示す結果であり、養成段階において十分に評価できる。

また、このような高い意識をもつ傍ら、養護教諭としてこどもの健康課題を捉える視点を持ち、その課題解決に向けた支援・指導及び助言に関する内容と方法を理解すること、個や集団に向けた指導方法を身につけていると感じていることは養護の本質に資することとも言えるため、学生が養護教諭の資質を十分に備えたと考えてよいものと思われる。

最後に、「みがく」－②・③の結果から、養護教諭の知識・技能を有する保育者を目指した2年間の学びの中で、学生はその強い意志を継続して努力したと感じていることがわかった。同時に、授業評価アンケートやには「大変だったが多くの学びを得た」や「保育士と同様に養護教諭としての魅力を十分に感じた2年間だった」「養護実習が一生の思い出となった」という記述が複数見られ、多様で複雑なカリキュラムの中でも学び得るものが多かったと評価している。ただ、「養護教諭または養護教諭の免許を有する保育者としての個性をみがくために、探求したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」という主題については、本学の建学の精神のもと、社会における今後の学びに期待し、養護教諭として、また養護教諭の免許を有した保育者としての成長を願っている。



◆1 年次前期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.6 点であった。
最も高い評価項目は、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」であり、3.8 点である。次に高い項目は、5 項目あり、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.7 点、⑦「実際の授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと思いますか」3.7 点、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.7 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.7 点であった。次に高い項目は、4 項目あり、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.6 点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.6 点、⑪「教員の説明が、わかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったとおもいますか」3.6 点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.6 点であった。

評価が低い項目は、2 項目あり、⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達することができたと思いますか」3.5 点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」であり、3.5 点であった。

評価点が、3.8 点以上と高評価だったのは、共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）の⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.81 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.80 点、伸展科目（国語、社会、算数）の⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.82 点、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.80 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.82 点であった。

また、評価点が、3.6 点より低かったのは、教養科目（法律学、情報技術、英語）では、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」は 3.36 点で全体平均 3.6 点より、0.24 点低かった。

共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）については、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」が 3.42 点で、全体平均 3.6 点より、0.18 点低かった。次に低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」は 3.45 点で全体平均 3.6 点より、0.15 点低かった。

また、伸展科目（国語、社会、算数）では、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.43 点で全体平均 3.7 点より 0.27 点低かった。

伸展科目（国語、社会、算数、英語）では、平均値が 3.7 点で教養科目（法律学、情報技術、英語）と共通科目（教育原理、教育経営論、ICT 活用の理論と方法）の 3.6 点より高く、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」の項目以外の②～⑬の 12 項目全てで教養科目、共通科目の数値より高かった。

【成果と課題】

前期 1 年生の 13 項目の中で、全項目の平均値 3.6 点より平均値が 3.5 点と低かったのが、⑧

と⑩であった。⑧については、特に教養科目（法律学、情報技術、英語）が3.53点と低くなっている。⑩については、特に教養科目が3.36点、共通科目（教育原理、教育経営論、ICT活用の理論と方法）が、3.45点と低くなっている。

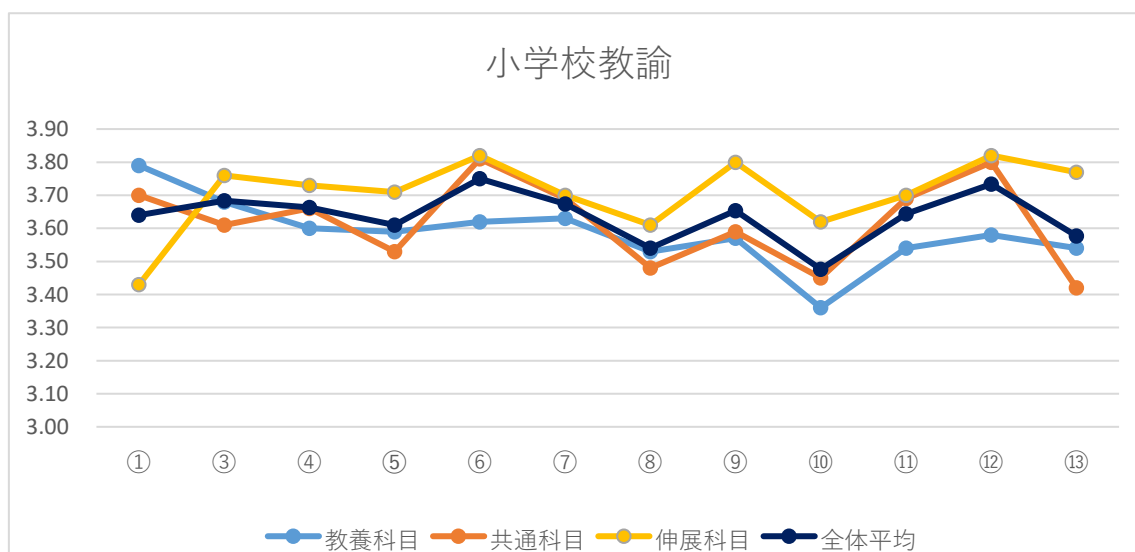
このことを改善するためには、学生にシラバスを意識させて、毎時間の授業の到達目標を学生に示し、達成できるようなワークシートや振り返りシートの活用を工夫するということが大切である。また、演習形式で、アクティブラーニングを意識させ、主体的で対話的な深い学びになるようなKJ法等の思考ツールを使用してのグループワークなどを取り入れて、相互の考えの交流を通して、実践的な指導力が身につくようにしていくようにし、学生にとって楽しい授業と感じる授業を工夫する。

また、授業内容が難しいと感じることがないように、授業の初めにシラバスについて説明し、この科目のゴールを明確に示しておくことが大切である。また、前時授業の振り返りと本時授業に自己評価を取り入れることやスモールステップで個々の理解度を把握しながら授業を進めていくなど学生が理解しやすいように多様な指導の工夫に努めることが大切である。

最も高い評価項目は、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」であり、3.8点であったので、学生にシラバスを意識させ、到達目標、ゴールを意識させて授業を進めていくということの成果が出始めている。

今後も模擬授業・ワークショップ（探検、観察、製作、話し合い）を多く取り入れ、学生自身が児童の立場を体験することができるようにする。「体験→気づき→表現・交流→振り返り」という学習過程を明確に意識させて体感させることに重点を置くようにする。模擬授業・ワークショップの後には、リフレクションの時間を取り、ループリック（学習評価のための基準表）を基に改善点を共有できるようにしていく。アクティブラーニングは大学教育で重視される概念であるが、小学校では、「主体的、対話的で深い学び」に位置付けられている。ワークショップ型の授業により、アクティブラーニングの理念を自然に体现できる。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.79	3.68	3.60	3.59	3.62	3.63	3.53	3.57	3.36	3.54	3.58	3.54	3.6
共通科目	3.70	3.61	3.66	3.53	3.81	3.69	3.48	3.59	3.45	3.69	3.80	3.42	3.6
伸展科目	3.43	3.76	3.73	3.71	3.82	3.70	3.61	3.80	3.62	3.70	3.82	3.77	3.7
全体平均	3.6	3.7	3.7	3.6	3.8	3.7	3.5	3.7	3.5	3.6	3.7	3.6	3.6



◆1 年次後期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.5 点であった。

最も高い評価項目は、2 項目あり、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.7 点⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.8 点であった。次に、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.7 点であった。

最も評価が低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.4 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.4 点であった。

教養科目（法律学、情報技術、英語）については、最も高い評価は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.53 点⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.53 点であった。最も低い評価は、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.32 点であった。

また、共通科目（発達心理学、教育課程論、教育の方法と技術）については、最も高い項目は、2 項目あり、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.85 点と⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.85 点であった。最も低い評価は、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.51 点であった。

伸展科目（国語科指導法、社会科指導法、算数科指導法、理科、理科指導法）については、最も高い項目は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」3.72 点であった。その次は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.57 点であった。最も低い評価は、最も評価が低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.26 点であり、その次に低かったのは、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.28 点であった。

【成果と課題】

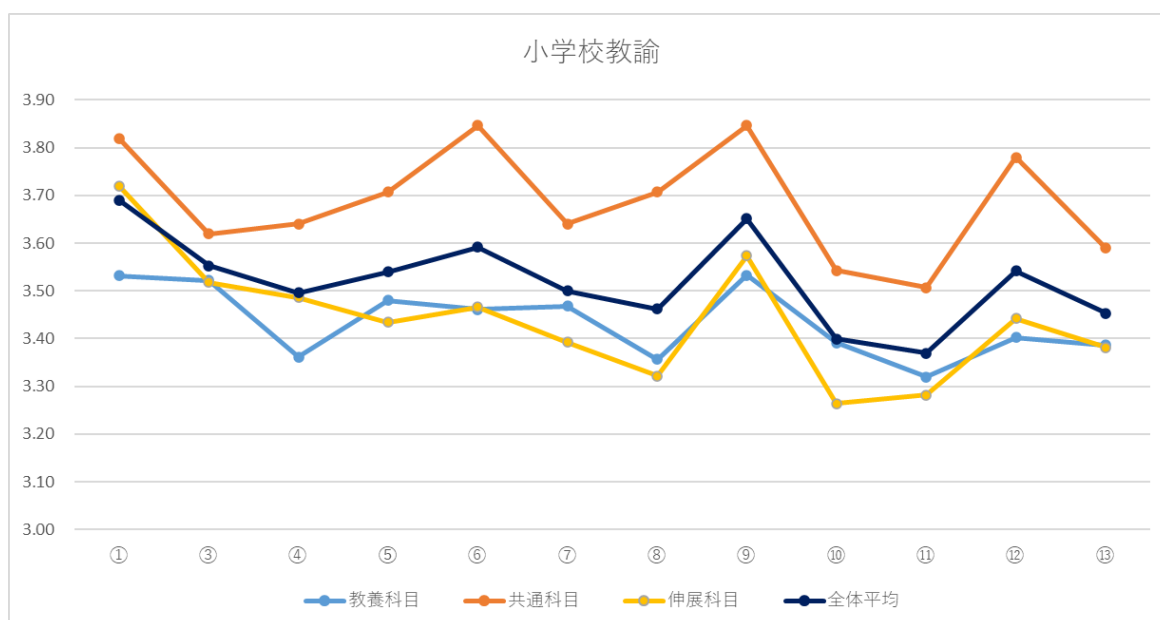
全体で、最も低い評価であった⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.4 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったと思いますか」3.4 点については、後期は、各教科等の指導法の科目が集中していて、パワーポイントによる発表資料作成、Word での指導案作成、模擬授業等の実践的な指導力を養成する科目のために、授業内容のレベルの高いと感じ、授業についていくことが難しいと感じている学生が存在する。しかしながら、レベルを落とすと学生の自己評価は高くなるが、小学校教育実習に行ったり、教職に就いたりしてから各教科等の指導法について、学生自身が高い壁を感じるようになるので、学生の理解を促す授業改善を担当教員が行っているので、3.4 点というおおむね高い評価点を維持できたと考える。

学生の理解度をスモールステップで把握しながら、授業内容を検討し、アクティブラーニングで対話活動、ディベートやパネルディスカッション、KJ 法などの思考ツールを取り入れたグループワークなどを取り入れ、相互の考えの交流・共有を通して、学生の思考を引き出し、実践的な指導力が身につくようにするとともに、学生にとって楽しい授業と感じる授業の工夫を継続していくことが重要である。

また、模擬授業では、指導案作成段階から、グループでの話し合いを取り入れ、模擬授業においても司会者を中心に模擬授業における振り返りをグループで行い、改善点や良いところを交流できるようにして、全員が積極的に参加できる工夫をする。シラバスを常に意識させて、学生自

身が主体的に取り組んでいることを意識させるようにする。学生の実態を考慮して、授業の難易度が適切であるようにする。毎時間、質問の時間を設定し、学生に寄り添って授業を進めていくなどの授業改善を継続していく。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.53	3.52	3.36	3.48	3.46	3.47	3.36	3.53	3.39	3.32	3.40	3.39	3.4
共通科目	3.82	3.62	3.64	3.71	3.85	3.64	3.71	3.85	3.54	3.51	3.78	3.59	3.7
伸展科目	3.72	3.52	3.49	3.43	3.47	3.39	3.32	3.57	3.26	3.28	3.44	3.38	3.4
全体平均	3.7	3.6	3.5	3.5	3.6	3.5	3.5	3.7	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5



◆ 2年次前期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.7 点であった。

最も高い評価項目は⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.9 点である。次に高かったのは、6 項目あり、④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.8 点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.8 点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.8 点、⑦「実際の授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと思いますか」3.8 点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」であり、3.2 点であった。⑪「教員の説明が、わかりやすく、授業の理解を深めることに役立ったとおもいますか」3.8 点であった。次に高かったのは、③「この授業にどのくらい主体的・積極的に取り組むことができましたか」3.7 点 ⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達することができ

たと思いますか」3.7点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.7点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.7点であった。

低かった評価項目は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」であり、3.4点であった。

教養科目（どうぶつ学、体育実技）の平均点は、3.8点、共通科目（教育概論、道徳理論と指導法）の平均点は、3.6点、伸展科目（こども家庭支援論、生活科指導法、家庭科指導法、体育科指導法）の平均点は、3.8点であった。項目別に3.9点以上と高評価だったのは、教養科目では、④「この授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解できましたか」3.93点、⑤「この授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができましたか」3.93点、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていたと思いますか」3.93点、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.93点であった。

⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」については、教養科目(3.93点)、共通科目(3.97点)、伸展科目(3.93点)共に3.9以上であった。

また、評価点が、3.6点より低かったのは、教養科目、共通科目では、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」(教養科目3.38点、共通科目3.19点)であった。その他の項目では、共通科目の⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」(3.55点)であった。

【成果と課題】

2年生前期の全体評価は、平均値が3.7点と高かった。

その中で、特に評価が低かったのは、①であった。改善点としては、本学では、マイアドバイザー制度があり、学生一人ひとりにアドバイザーの教員がいるので、個別に面談をして出席を促すようにしている。後期学修では、保育実習、教育実習、園訪問等の就職活動もあり、体調を整え、出席率向上を目指して学生との個別の面談を密にしていく。また、共通科目で低かった⑬については、毎時間の講義形式の授業の中に、教員が意図的、計画的に質問の時間を意識して設定していくことで改善できる。

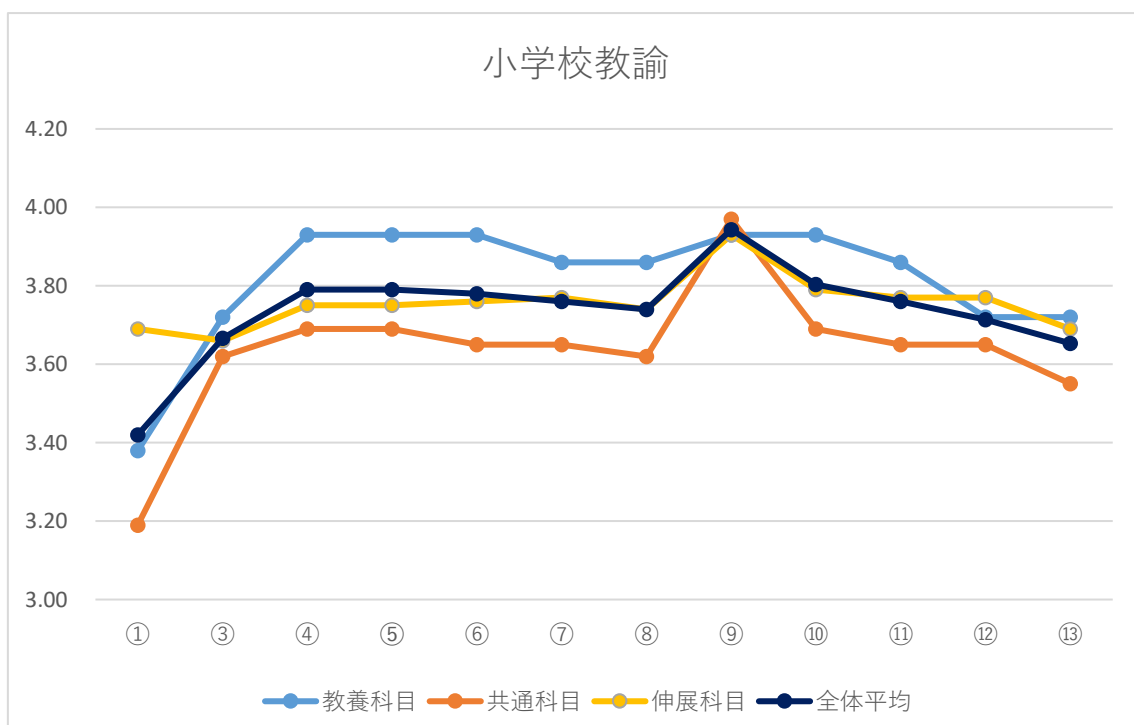
2年前期の教養科目、伸展科目の評価が高かった要因は、模擬授業・ワークショップ（探検、観察、製作、グループワーク、話し合い）を多く取り入れ、学生自身が児童の立場を体験することができるようにしたり、「体験→気づき→表現・交流→振り返り」という学習過程を明確に意識させて体感させることができたりする科目であるために、分かる楽しさを学生が体験することができたと考えられる。

また、「教科書や補助教材、板書、ICT機器等を効果的に取り入れ、学生の質問にも応え、模擬授業・ワークショップの後には、リフレクションの時間を取り、ルーブリック（学習評価のための基準表）を基に改善点を共有できるようにしてことで、授業に主体的・積極的に取り組むことができ、アクティブラーニングの理念を自然に体現することができた。

その結果、学生は、授業のペースにしっかり追いついていき、授業で学ぶ内容の意義や必要性を十分に理解でき、授業の到達目標を意識しながら授業を受けることができた判断される。学生が、授業がシラバスに沿って進められていたと意識していて、授業が、シラバスに書かれている到達目標に達することを目指した内容になっていたと自覚していることは、毎時間の自己評価にも良い影響を与え、授業内容を深く理解することができることにつながったと判断される。

大学でのアクティブラーニング型の授業は、学習指導要領が目指す学びを体験的に理解し、子どもに還元できる教師を育成するために大切である、今後もアクティブラーニング型の授業を意識して取り組むことが重要である。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.38	3.72	3.93	3.93	3.93	3.86	3.86	3.93	3.93	3.86	3.72	3.72	3.8
共通科目	3.19	3.62	3.69	3.69	3.65	3.65	3.62	3.97	3.69	3.65	3.65	3.55	3.6
伸展科目	3.69	3.66	3.75	3.75	3.76	3.77	3.74	3.93	3.79	3.77	3.77	3.69	3.8
全体平均	3.4	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.9	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7



◆ 2年次後期

アンケート集計結果より 13 項目の全体平均は、4 点満点中 3.7 点であった。
 最も高い評価項目は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」
 3.9 点であった。その次は、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」
 3.8 点であった。最も低い評価は、6 項目あり、⑥「この授業がシラバスに沿って進められていた
 と思いますか」3.6 点、⑦「実際の授業がシラバスに書かれている到達目標に達することを目指し
 た内容になっていたと思いますか」3.6 点、⑧「到達目標にどのくらい近づくこと、あるいは到達
 することができたと思いますか」3.6 点、⑪「教員の説明がわかりやすく、授業の理解を深めるこ
 とに役立ったと思いますか」3.6 点、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT 機器等が内容を理解するこ
 とに役立ったと思いますか」3.6 点、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあっ
 たと思いますか」3.6 点であった。

教養科目（レクリエーション講義・実技、体育実技）では、最も高い評価項目は、⑨「授業のペ

ースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.77点であり、その次は、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.76点であった。最も低い評価は、⑫「教科書や補助教材、板書、ICT機器等が内容を理解することに役立ったと思いますか」3.47点であった。

共通科目（特別支援教育、特別活動及び総合的な学習の時間、教育相談、教職実践演習）では、最も高い評価は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.97点と⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.97点であった。最も低い評価は、①「この授業にどのくらいの割合で出席しましたか」であり、3.47点であった。

伸展科目（図画工作指導法、外国語指導法）では、最も高い評価は、⑨「授業のペースに追いつけないと感じることがどのくらいありましたか」3.83点であった。最も低い評価は、⑬「この授業にわからないことを質問する機会が十分にあったと思いますか」3.10点であった。その次に低かったのは、⑩「この授業で学ぶ内容の難しさについてどのように感じましたか」3.28点であった。

【成果と課題】

アンケート集計結果より13項目の全体平均は、4点満点中3.7点であり、学生の自己評価は高くなっている。学生は、学位修得を目前にして、教育者としての個性をみがくために、探究したい（生涯にわたる課題）を持つことができるようになり、課題解決に向けて、学び続ける姿勢を持つことができるようになってきている。

本学では、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材育成は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要であると考え、取り組んできている。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換を行っていて、学生の主体的な学修を促す質の高い教育を目指している。

また、アクティブラーニングの実現に向けては、次の3つの視点で授業改善を行っている。①授業に見通しを持って粘り強く取り組み、学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」ができているかという視点、②自己の考えを広め深める「対話的な学び」ができているかという視点、③各教科等の特筆に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出だして解決策を考えさせたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現しているかという視点である。

共通科目で評価が低かった①については、2年生後期になり、卒業を控え、就職活動等で欠席する日が増えているために自己評価が低くなっている。

また、ここでは、評価点について述べていないが、②「授業時間外の学習に週平均どのくらいの時間を使いましたか」についての学生の自己評価が低いことについては、卒業後、教職に就いても研修や教材研究に主体的に熱意を持って取り組むことができる人材を育成することにつながるため、今後も重点課題として取り組む必要がある。学修は、授業だけでなく予習—授業—復習といった、一連のサイクルを通じて深められるものであり、生涯にわたって効果的に学び続けていく上では、そうしたサイクルで教材研究等自己研鑽し実践的指導力を身に付けていく必要がある。授業外でも学修に取り組む中で、自律性や学修スキルが向上する。大学教育でも、事前準備や事後の学修も含めて単位認定を行うようになっており（中央教育審議会、2012）、授業だけでなく、予習や復習などの授業外学修を通じて、学修スキルを育成していくことが目指されている。次回の授業に向けて予習を行うことは、授業での理解を深める上で非常に重要であり、授業内容と関連する知識が事前に活性化されることで、既有知識と新たな情報を関連づけ、疑問点を把握しながら授業に参加でき

るようになることが可能である。今後も継続的な取り組みを行う必要がある。

	①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	全項目
教養科目	3.70	3.74	3.72	3.62	3.60	3.66	3.52	3.77	3.76	3.64	3.47	3.66	3.7
共通科目	3.47	3.93	3.93	3.93	3.93	3.93	3.93	3.97	3.97	3.93	3.93	3.93	3.9
伸展科目	3.78	3.48	3.53	3.40	3.35	3.35	3.40	3.83	3.60	3.28	3.30	3.10	3.4
全体平均	3.6	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.9	3.8	3.6	3.6	3.6	3.7

